

料理人4代 (009)

タヴォラアミーカ 栄楽亭 小島敏裕

イタリア生活の始まり

いよいよイタリアへ渡ることが決まり、私は異国での暮らしに不安を募らせながら荷物の整理を…していませんでした。出発までに120号の日本画を完成させようと、仕事が終わるや絵の製作にかかりっきりの毎日で、何の準備も始めない私に両親はやきもきしていたようです。

「あんたは知らん国に行くのにナンも心配しとらんねえ。」別に樂觀していたわけではないのですが今よりはるかに情報の少ない頃です。一応イタ

リア語も少しは勉強したし、まあ何とかなるだろう…と、それ以上考えが進まなかったというところでしょうか。出発の前夜には、友人達と吉田拓郎のコンサートで盛り上がっていました。南回りで今の倍近い時間をかけ、ローマのレオナルド・ダ・ビンチ空港に着いた私を迎えてくれたのは、父の長年の友人でもあり私も面識のあったロランド氏。すぐにローマ郊外、海岸の町オスチアにあるエナルク職業訓練ホテル学校に連れていかれました。

政権の移り変わりにより、国立となったり州立となったりして、授業形態も多少変化があるようですが、調理師コース、サービスコースの他・管理や事務のコースもあり、それぞれ2年で基礎を身につけるための学校です。

入学手続きをすませたものの、新学期までにはまだ2ヶ月あります。その間、サービスコースの教官がオーナーとなっているレストランに住み込むことになりました。

余談ですが、この年はイタリアがサッカーのワールドカップで優勝した年です。着く早々最終2戦がたて続き、国中が沸き上がるさまを目にしました。こぶしを振り上げ、テレビに向かって咆哮し（女の子もですよ）優勝が決まるや車に乗って町の中央広場へ向かいます。

窓からのり出し、笛やクラクションを響かせて、前後左右接触ストレスでパレードする暴走族さながらの一般市民。私もその中に埋もれていました。



夜の若者たち（オスチア）

ホテル学校が始まるまで住み込むことになったレストランは、オスチアの町でもかなりの高級店でした。が、何とそこはディスコテカの2階という、おそろしい場所だったのです。

営業はチェーナ（夕食）のみ。終業は深夜零時前後になります。「さあ寝よっ」とベットにもぐり込むと、階下からのリズムがドンドン響き、ディスコの終わる午前3時まで寝るのはあきらめた方がよさそう。

で、下に降りていくと黒人のディスクジョッキーが、「来たな。踊っていけよ」と快く通してくれるのでした。

ここには未成年者は入ることはできません。若者達に解放されるのは週末の午後のみで早くから行列ができるほどですが、普段は完全に大人の世界です。

フロアで踊る中、ふと気がつく、目の前に見上げるほどの体格の男が体をのしかけるようにせまってきます。面白いのでヒラヒラかわして遊んでいましたが、ボックスにもどると、「お前何やってんだよ、あんなやつ相手にしちゃダメだよ！」

そーかなあ、目の前を行き来する、あやしげな手巻きタバコの方がよっぽどヤバイんじゃないでしょうか。

完全に夜型のリズムの中、いろんな人種とつきあいながら（ふーん、イタリアってこういう国か）と思っていましたが、後になってふり返るとかなり特殊な環境からスタートしていたことが分かりました。

イタリア人の家庭に入ってみるとまるで様相が変わります。何ととってもカトリックの総本山、バチカンのおひざもと。夜8時を過ぎれば町はひっそり静まり、明かりがついているのはレストランとジェラテリア、映画館くらいでしょうか。

私はどうやら、あぶないイタリアから入っていたようです。